

<ワン・ポイント・レクチャー> こども未来コース(応用編)

第8回：思春期の厄介な行動に立ち向かいますか？

立ち向かうと聞くと「ぶつかる」とか「やり合う」とかをイメージするのではないのでしょうか。時と場合によってはやり合う＝対決することは非常に重要です。体格的にも勝るようになっているかもしれませんが、場合によっては親以上に口が立つようになっている思春期にある子どもに対してであっても、その時には決して逃げずに、最後までやり合う“覚悟”を親は持つべきです。

ただし、それは対等の立場でやり合うべきで、親・子という“上・下”の立場でやり合っただけではありません。また、対等の立場でやり合う以上は、子どもの言い分にしっかりと耳を傾け、理解するように努める姿勢が不可欠です。

ここで言う“理解をする”というのは、子どもの言い分を認める、許すということではありません。言い分に含まれる内容と感情を聴き手である親の耳・目を通して頭の中に受け入れるということです。その上で論理的に考えて不都合な点や納得できない点があるのであれば子どもに対してできる限り感情的になることなく、筋道を立ててどこがどう理解できないか、納得できないか、不都合なのかを、子どもに分かるように問い返していくことが大切です。また、それによってしか子どもに対する理解を深めることが出来ないのです。

こう言われると、「悠長なことを言われてられる状況や冷静さを保てることが出来ていればそうするけど、その時の状況や感情の状態によってはそんな風な対応をすることが出来るとは思えない」と言い返したくなると思います。その意見、実に御もつともな意見ですので、出来ない時があっても結構です。子どもはもとより大人も“神さま”ではありませんので、そんな対応がいつもいつも出来るわけではありません。が、出来るか出来ないか、白か黒か、0か100かで考えるのではなく、10回に1回でも出来るように努力し続けることが大切なんです。努力し続けている姿勢を子どもに見せ続けることが重要なんです。

以前のワン・ポイント・レクチャーでも書きましたが、親子関係、特に母親との関係は共生関係であり、愛着関係でもありますが、その関係がしっかりと出来てこそ子どもは「人への信頼」を得ることが可能となります。そのことは非常に重要な意味を持ちます。つまり、人に対して信頼を持つことが出来てこそ、人が成長、成熟していくための必須要素であるいろいろな“こと”に取り組み、いろいろな“人”と関わることが出来るようになりますし、その結果、様々な失敗・成功体験を重ねることが出来ることになるからです。

因みに、京都大学名誉教授の河合隼雄氏は、思春期から青年期の時期を「サナギの時期」と呼んでいます。その時期は、自身で捉えている自分と、他の人が見ている自分とのチグハグさに戸惑い、自分がどんな人間かを確かめようと悪戦苦闘する年代でもあります。したがって、ころの中でも、外の間関係でも、いろいろな葛藤が生じてきます。しかし、成功・失敗体験を重ねてきた子どもは、そのプロセスにおいて必ずころの内を打ち明けることが出来る人に出会うこと

が出来ます。

抱いた葛藤を共に背負い、歩いてくれる、その立場に親が立つことが出来れば(信頼できる存在として子どもから認められれば)、子どもにとっては最善ですが、その立場に親が立つことが出来るようになるためには、思春期に入る前の時期から対等の関係で子どもに立ち向かおうとし、接し続けることが必須なんです。

もし万が一、思春期において子どもの親への信頼が大きく揺らいだとしても、それまでに失敗・成功体験を積み重ねることが出来た子どもに信頼を置くことが出来る親以外の“人物”が出来ているでしょうし、親に代わってその人物が葛藤を共に背負い、歩いていってくれるようになります。安心して下さい。